episode.03

笠沙の定置網漁

話し手 漁師
中尾 雄作（なかお ゆうさく）さん （昭和 25 年 1 月 13 日生）

聞き手 鹿児島県立鹿児島水産高等学校２年
若松　一虎　　上籠　海晴
大隣　歩

「笠沙の定置網漁の特徴やこだわり」

私は、漁師になって 48 年になります。漁師になった頃は、この辺では定置網漁のことを「しび網」、「しっびゃん」って言ってたんですね。つまりマグロの網ですね。マグロが主なターゲットだったんです。

ところがマグロの漁獲は今でも制限があるようにいろいろ変動するんですね。漁獲量が安定しないっちゅうことで、青物とか獲れるようにしたらどうかちゅ言うんで、目の小さい網を導入しました。そうすると今までとれなかったカマスとかアジとか青物がとれるようになって、ターゲットが青物に変わっていったんですね。

この辺では江戸時代からずっと定置網がいろんな場所に設置されていました。仕掛ける場所は、昔の人は海底を見る手段がないから、山の形状を見て海底の形を予想して決めていたんですね。海底にも、尾根があって谷があって、魚も尾根を越えていかなければならないんですよ。そういう尾根と尾根の間に入ってるんですよ、定置網って全部。今はもう海底探査機を参考に仕掛けますけど、ほとんど昔の位置と変わらないんです。

「全国の水族館に注目される理由」

笠沙の海の地形は、遠浅になってて、そこに南から黒潮がドーンと入ってくるんですよ。これに乗って魚が入り込んでくるんで、種類も多いわけです。片浦だけで魚種が 600 種類以上、定置網に入るんじゃないかな。小さいのは“ちりめん”からでっかいのは“マッコウクジラ”まで入ります。こういう地形や温暖というのを生かして、笠沙の海は次第に水産試験場や養殖場、水族館の活用の場になってきました。

昭和 30 年代　片浦漁港

昭和 30 年代　片浦漁港

「活かす技術」

30 年くらい前に葛西水族館から世界でどこもやってないクロマグロの展示をしたいという事で相談があってね。その前に水産試験場でマグロ養殖をする時、片浦の漁師が協力してマグロを確保してきたものですから、その技術を生かしてここに話があったんですね。

お盆過ぎからクロマグロの稚魚が取れるんで、いけすを準備して年間 1,000 匹～ 2,000 匹を、神奈川県の三崎に持って行って、葛西水族館に運んで世界で初めてクロマグロの展示ができたということですね。

他にも、鹿児島水族館のジンベエザメや香港・マレーシアの水族館などいろんな繋がりがありますね。

「山を生かし、地域を興すために」

昔から定置網をしてる人達は、山が大事だっちゅうこと知ってたんで、魚つき保安林っちゅうのがずっとあるんです。魚つき保安林は、広葉樹を植えて豊かな森を海際まで持って来ると、森の栄養分が海に湧き出て魚の餌になるプランクトンが繁殖したり、木陰ができて魚が寄ってきやすい。他にも最近は、道路橋のコンクリートが光を反射し、魚が嫌うので、お願いして海側だけ緑色に塗ってもらいました。

昔から山は海の恋人って言われてるように、山から豊かな栄養分が海に流れてこないと魚も寄ってこないんですね。

漁業は先進的な役割を果たしてきたものなんですね。地元には産業だけじゃなく環境も観光もある。地元に食材があるんだけど活かしきれてないものもあるので、いろんな人と協力体制をとって、もっと人も呼べるように人材育成などしていきたいですね。